序　文

本年四月に突然病に倒れられた鈴木尚先生は、その後驚異的な回復を示され、九月には先生が在職中につくられた成城大学のいわゆる総合講座の講師として姿を見せられた。本当に思いがけなく、かつ喜ばしい限りであった。

明治末年生れの高名な人類学者鈴木尚先生に成城大学経済学部の一般教育科目自然科学系列の担当教授としておいでいただいたのは、昭和五一年四月のことであった。爾来六年間、先生には私たち経済学部の同僚として、公私にわたって非常な御尽力をいただいたのであるが、昭和五六年度に古稀を迎えられ、本学の定めるところに従って、昭和五七年三月末日をもって定年退職をされた。

先生が日本、いな世界の人類学界の数すくない指導者の一人であられることは、私たちもよく学内外で耳にしていたところであった。しかし、学部内においては先生は、われわれにこのことを微塵も感じさせることがなかったので、時として私たちはこのことを忘れてしまう程であった。先生の輝かしい業績と経歴とからみると、いかにも軽い雑用係的側面をも持つ経済学部一般教育主任という役を、先生はいやな顔ひとつなされずに淡々と引受けられ、しかも実に見事にこなして来られたのである。

序　文

成城大学での先生の日常を拝見していて、私たちがもっとも感じ入っていることは、先生の日常が柔道などでいう自然体の生き方そのもののように見うけられることである。内にみなぎる力をソフトにつつみこみ、しかも何のケレン味もなく仕事をすすめられてゆかれる先生の御様子は、われわれに真の大学者の姿というものを焼きつけて下さったような気がしている。

今回成城大学経済学部では、先生の古稀をお祝いして、雑誌成城大学「経済研究」の特別号を編ませていただくことにした。私たちは先生の流儀にならって、きわめて自然体的な編集をさせていただいた。特集テーマを決めることもせず、また寄稿者も特定しなかった。しかし寄稿者それぞれには力一杯のものを寄せていただいたのである。

鈴木尚先生には、日本人類学会がその総力をあげて古稀をお祝いする学問的行事がなされたようである（日本人類学会編、人類学雑誌、九〇巻別号、鈴木尚先生古稀記念特集「日本人」、昭和五七年一〇月）。

これとくらべると、まことにささやかではあるが、私たち成城大学経済学部の後輩は、本記念号をもって、先生の古稀をお祝いし、あわせて先生の日頃の御指導に感謝し、先生の一層の御健康と御活躍を祈る次第である。

昭和五七年一一月

成城大学経済学部長

池田浩太郎